

中国朝鮮語のアクセントの諸相

河須崎 英 之

1. はじめに

中国に住む朝鮮族の言語（以下、中国朝鮮語）については、近年の中国国内での言語政策転換などとも関係して多くの研究がなされている。筆者ⁱは、中国朝鮮語のアクセントに焦点を当ててその記述をおこなってきた。本論文では、中国黒龍江省哈爾濱市にて中国朝鮮語話者を対象に行った調査をもとに、出身地の違う話者それぞれのアクセント体系を記述し、中国朝鮮語のアクセントにどのような変化が起こっているかを考察するⁱⁱ。

2. 先行研究

2.1. 中国朝鮮語の多様性について

中国朝鮮語の方言分布については趙習（1992）や宮下尚子（2007）にまとめられている。例えば、咸鏡道方言は主に吉林省延辺地区および黒龍江省牡丹江地区に分布し、慶尚道方言は、主に黒龍江省の西北と西南部で用いられているとされる。延辺地域の中国朝鮮語と咸鏡道方言との類似は福井玲（2000）などでも指摘されてきた。とはいえ、延辺地域の中国朝鮮語に関する報告でも、朴永梅（2001）、車香春（2004）、蔡玉子（2005）などがあり、その実態は均一なものではない。河須崎（2010）では延辺や牡丹江など咸鏡道方言に近いアクセント体系を持つ話者にも、出身地域によっていろいろな体系が見受けられることを指摘した。また、李文淑（2008）で記述されている黒龍江省南部の尚志市で話されている朝鮮語は、上記の指摘に合致し慶尚道方言との類似点を持っているが、アクセントの揺れが激しく、「激変している言語状態がアクセント体系に反映されている」と述べられている（李2008: 126）。

黒龍江省哈爾濱における朝鮮語のアクセントを調査したものには、呂海玉（2009）がある。そこでは、複数のインフォーマントのデータから、「ハルビン市における朝鮮語のアクセントは、調査した範囲では一型・無アクセントである」と述べられているが、データを精査するとインフォーマントの出身地による相違もみられ、哈爾濱における朝鮮語が均一でないことを示しているともいえる。また、河須崎（2013）は、哈爾濱に在住する、黒龍江省鉄力出身話者の名詞アクセントについて記述している。この話者については本稿でも重ねて論ずることにする。

ⁱ 福井玲先生には、筆者が東京大学大学院人文社会系研究科にて博士号を取得するまで、指導教員として種々にご教示をいただいていた。中国朝鮮語という研究フィールドに進んだのも福井先生の導きによるものである。福井先生のご退官にあたり、あらためて深く感謝申し上げる。

ⁱⁱ 本論文は、2013年の日本音声学会第27回大会における発表ならびに2015年の日本音声学会第331回研究例会における発表の内容を、新たにまとめ直したものである。本来なら、それぞれの発表にいただいたコメントを踏まえ、新たな調査結果などを盛り込んだものにすべきであるが、筆者の怠慢により今日まで調査を行えないまま時間がたってしまった。この時点での調査結果を論文の形でまとめておくことも、今後の中国朝鮮語のアクセント研究に多少なりとも意義のあることであろうという考えから、公表するものである。投稿の機会を与えてくださった関係者の方々に謝意を表したい。

中国朝鮮語の社会言語学的な研究としては高木丈也（2019）がある。吉林省、遼寧省における朝鮮語話者の言語使用と意識の分析に加えて、黒龍江省哈爾浜市の朝鮮族中学校、高校における調査の結果も分析されている。調査対象は移住世代から数えて4、5代目の若者であり、調査結果として、対話者による言語使用は相手の年代が下がるほど漢語の使用比率が高くなること、朝鮮語の習得、継承に対してはプラスのイメージを持っていることなどが示されている。また、話しことばとしての黒龍江省朝鮮語は、慶尚道方言、中国朝鮮語、韓国語、朝鮮語の他方言、漢語などの影響を受けたハイブリッドな言語変種であると述べている。

3. インフォーマントについて

本論文では3名のインフォーマントのデータを取り上げる。後述の通り、いずれも哈爾浜の朝鮮族学校で教師をしている女性で、高木（2019）で扱われている世代よりも少し上の世代ということになる。

・鉄力出身話者：1977年生まれ、女性。2012年調査時には、哈爾浜の朝鮮族学校にて教師をしている。小学、中学は鉄力の朝鮮族の学校。高校は哈爾浜の近く、大学は延辺。鉄力には慶尚道系の人が多く、インフォーマントの家系は慶尚道系だが、母は咸鏡道出身かもしれないとのこと。また、他の朝鮮語話者からは、「平安道のような話し方をする」と指摘されるという。この話者の名詞アクセントについては、河須崎（2013）に記述しているが、本稿でも重ねて触れることとする。

・亜布力出身話者：1973年生まれ、女性。2012年の調査時は哈爾浜の朝鮮族学校において教師をしている。高校まで地元の朝鮮族の学校に通い、大学は延辺。父は慶尚道（全羅道との境近く）出身、母は咸鏡道出身。慶尚道の言葉、咸鏡道の言葉、平安道の言葉を聞き分けることができるという。李（2008）によると、尚志市の話者は、1音節名詞はほぼH.H、2音節名詞も大部分HHで現れるようだが、後述するように、この亜布力出身話者はそのような体系とは異なっている。

・牡丹江出身話者：1974年生まれ、女性。2012年の調査時は哈爾浜の朝鮮族学校において教師をしている。高校まで牡丹江の朝鮮族の学校に通い、大学は延辺。大学卒業後、日本語教師として哈爾浜の朝鮮族学校で勤めている。哈爾浜の言葉と自分の言葉との違いを自覚している。なお、他の牡丹江出身話者から聞き取ったことだが、以前は牡丹江のラジオ放送は「牡丹江の言葉」でなされていたが、最近は「ソウルの言葉」でなされているとのこと。ちなみに、この話者は、河須崎（2010）で紹介している牡丹江話者の教え子にあたる。河須崎（2010）での牡丹江話者と今回のインフォーマントとの違いについても、随時述べていくことにする。

4. 名詞のアクセント体系

4.1. 1音節名詞

鉄力出身話者では、どの助詞がついた場合も、言い切り形と接続形の区別が見られる。言い切り形は、助詞をつけた場合もそこで終わるような言い方、接続形はあとに言葉が続く言い方

である。言い切り形は名詞のみが高く助詞は低く現れる。助詞が2音節の場合、助詞の2音節目（アクセント句の3音節目）は、高くても低くても区別はないようである。接続形では名詞が低く、助詞の1音節目が高く現れる。2音節以上の助詞の場合、助詞の2音節目（アクセント句の3音節目）は高くても低くても区別はないようである。接続形でも、名詞を強調した言い方をする、言い切り形と同じ型が現れる。よって、言い切り形といった場合には、強調の接続形も含むこととする。Xを任意の高さとしてまとめると以下ようになる。

鉄力出身話者・1音節名詞のアクセント（アクセント対立なし）

アクセント句の音節数	2音節	3音節
言い切り形・強調の接続形	HL	HLX
接続形	LH	LHX

亜布力出身話者も、1音節名詞にアクセント対立は認められない。1音節助詞がついた場合は、言い切り形ではHL、接続形ではLHで現れる。

亜布力出身話者・1音節名詞のアクセント（アクセント対立なし）

アクセント句の音節数	2音節	3音節
言い切り形・強調の接続形	HL	HLX
接続形	LH	LHX

牡丹江出身話者は、助詞によってアクセント交替が見られる。主格助詞をつけた場合にLHで現れる語はdalɣ「鶏」のみで、あとはHLで現れる。また、処格助詞がつくとすべての名詞がLHで現れる。ただし、be「船」、se「鳥」のような語では、処格助詞をつけた場合もHLで現れることがある。このように処格助詞がついた場合にLHとなる現象は、吉林省の龍井出身話者などでも見られた（河須崎（2010）参照）。また、本論文のインフォーマントを教えたこともある河須崎（2010）で扱った牡丹江出身話者にも同じ現象が見られたが、本論文のインフォーマントの方がより交替が徹底しているといつてよい。

2音節以上の助詞がついた場合は、HLLで現れる場合とLHXで現れる場合があるが、それぞれが語によって決まっているわけではなく、アクセント対立ではないと考えられる。鉄力、亜布力の話者のように、言い切り形と接続形の違いである可能性があるが、現時点での調査資料ではそこまで断言はできない。

牡丹江出身話者・1音節名詞のアクセント（アクセント対立なし）

アクセント句の音節数	2音節	3音節
主格助詞がついた場合	HL (talɣが例外)	HLL~LHX
処格助詞がついた場合	LH (一部HLあり)	

4.2. 2音節名詞

鉄力出身話者は、2音節名詞はほとんどが単独でLHで現れるが、単独でHLで現れる語が若干ある。ange「霧」、yɔmsɔ「ヤギ」、tok'i「ウサギ」、pili「笛」などである。単独でLHで

現れる語を HL で発音したり、HL であられる語を LH で発音したりした場合には、おかしい感じがすると述べている。HL で現れる語については、助詞がついた場合に言い切り形と接続形がある。単独で HL で現れる語も、助詞がついた場合の接続形では LH.X もしくは LH.XX となり、言い切り形もしくは強調の接続形は名詞が HL のままで現れる。

鉄力出身話者・2 音節名詞のアクセント（LH と HL の対立あり）

音節数	2 音節	3 音節	4 音節
	LH	LH.X	LH.XX
言い切り形	HL	HLL	HLLL
接続形		LHX	LH.XX

呂（2009）では、「ハルピン方言」において HL で現れる語は母音（半母音）・激音・濃音から始まるとしているが、この話者もその通りの傾向となる。また、現在のソウル方言も、語頭音節がアクセントの決定に影響を及ぼしていると考えられる。なおソウル方言では語頭子音が激音、濃音、s、h の場合に第 1 音節が高くなるとされ、母音始まりの語についてはそのようなことがない。

亜布力出身話者は、ほとんどが LH で現れるが、ange「霧」、tok'i「ウサギ」、pali「蠅」、pili「笛」、hanul「空」など、いくつかの 2 音節名詞は単独で HL で現れる。これらも助詞をつけた場合には LH.X が現れることもあるが、多くの場合は HL を保っている。言い切り形と接続形の違いというよりも、単純なアクセントの揺れであるように見受けられる。

亜布力出身話者・2 音節名詞のアクセント（LH と HL の対立あり）

音節数	2 音節	3 音節	4 音節
	LH	LH.X	LH.XX
	HL	HLL～LH.X	HLLL～LH.XX

牡丹江出身話者は、主格助詞をつけた場合は 単独で HL と LH の対立が存在する。助詞がついた場合は、それぞれ、HLL、LHL のようになるが、LH の一部の語に処格助詞がついた場合は LH.H が現れる。ただし、そのような語も LHL で発音されることがあり、アクセント対立はない。なお、河須崎（2010）で扱った牡丹江出身話者でも処格助詞がついた時に LH.H となる語が存在し、その話者の場合はアクセント対立と考えることができた。それらはすべて子音終わりの語であったが、本論文の話者では、母音終わりの語も LH.H で現れている。

単独で HL で現れる語には以下のようなものがあり、鉄力、亜布力の話者と比べて HL で現れる語が多いことが分かる。mogi「蚊」、yomso「ヤギ」、tok'i「ウサギ」、pali「蠅」、pili「笛」、salam「人」、bobe「宝物」、ange「霧」、jebi「ツバメ」。

牡丹江出身話者・2音節名詞のアクセント（LH と HL の対立あり）

音節数	2音節	3音節	4音節
	LH	LHX	LH.XX
	HL	HLL	HLLL～LH.XX

4.3. 3音節名詞

鉄力出身話者は、LHX、LHH.X、LHH.XX となり、第1音節が高い型は現れない。アクセント対立はないといってよい。

亜布力出身話者もアクセント対立はなく、LHX、LHX.X、LHX.XX で現れる。1音節の助詞がついた場合、母音終わりの語は LHL.L、子音終わりの語は LHH.L のように現れることが多いが、あくまでもそのような傾向があるというレベルで、アクセント対立ではない。

k'amagwi 「カラス」 LHL、LHL.L
sonk'alag 「指」 LHL、LHH.L

牡丹江出身話者では、HLL、LHL、LHH の対立が観察される。

mujige 「虹」 HLL、HLL.L、HLLL.L
kok'ili 「象」 LHL、LHL.L、LHL.LL
k'amagwi 「カラス」 LHH、LHH.L、LHH.XX

5. 動詞のアクセント体系

5.1. 1音節語幹動詞

鉄力出身話者は、アクセント句が2音節の場合は H.L、3音節の場合は H.LL、4音節の場合は L.HLL が標準的な型として現れる。ただし、-a / ɔt'a がついて3音節になった場合は、L.HL の方が標準となる。-a / ɔt'a は、-a / ɔ の部分が H となりやすい語尾と言える。

上記の標準的な型に合わない例として、-s'umida をつけた際に、H.LLL で現れる子音語幹の語がいくつかある（caj-「探す」、ɔbs'-「ない」、swib-「容易だ」など）。liul 語幹と母音語幹は、おおむね上記の標準の型で現れるが、pal-「売る」と t'wi-「跳ねる」のみ、-a / ɔt'a がついた場合も H.LL で現れた。アクセント句の長さで整理してみると以下ようになる。

鉄力出身話者・1音節語幹動詞のアクセント

	2	3	-a / ɔ の語尾	4
子音語幹	H.L	H.LL	L.HL	L.HLL / H.LLL
liul 語幹	H.L	H.LL	L.HL / H.LL	
母音語幹	H.L	H.LL	L.HL / H.LL	

斜線で区切られているものについて、左側が標準的な型だとすると、そうでないものは語頭子音が激音（s を含む）、濃音、ゼロ（母音始まり）という特徴が見られる。ただ、そのような音節構造を持つ語がすべて同じ振る舞いをするわけでもなく、あくまでもそのような傾向が

あるというレベルである。

亜布力出身話者は、子音語幹動詞、liul 語幹動詞には、アクセント句が2音節の場合に H.L で現れるものと L.H で現れるものがある。母音語幹動詞は、アクセント句が2音節の場合は L.H で現れるものはなかった。子音語幹動詞と liul 語幹動詞で H.L で現れる語も、アクセント句が3音節以上になると、H.L.L (L) と L.H.L (L) との揺れが見られる。アクセント句3音節以上では、L.H.L (L) が標準的な型とみることができる。

亜布力出身話者・1音節語幹動詞のアクセント

	2	3	-a / ɔ の語尾	4
子音語幹	H.L	H.L.L ~ L.H.L	H.L.L ~ L.H.L	H.L.L.L ~ L.H.L.L
	L.H	L.H.L	L.H.L	L.H.L.L
liul 語幹	H.L	H.L.L ~ L.H.L	H.L.L ~ L.H.L	
	L.H	L.H.L	L.H.L	
母音語幹	H.L	H.L.L ~ L.H.L		

子音語幹動詞で H.L で現れるのは、語頭子音が激音、濃音、ゼロの語がほとんどであるが、liul 語幹動詞や母音語幹動詞ではそうとは限らない。

牡丹江出身話者は、子音語幹動詞において語幹が一貫して H で現れる語と一貫して L で現れる語、-a / ɔ で始まる語尾がついた時にアクセントの交替が起きる語の3種類が認められる。また、liul 語幹動詞にも、語幹が一貫して H で現れる語と、-a / ɔ で始まる語尾がついた時にアクセントの交替が起きる語とがある。母音語幹動詞では語幹が一貫して H で現れる。

牡丹江出身話者・1音節語幹動詞のアクセント

	2	3	-a / ɔ の語尾	4
子音語幹	H.L	H.L.L	H.L.L	H.L.L.L
	H.L	H.L.L	L.H.L	L.H.L.L
	L.H	L.H.L	L.H.L	L.H.L.L
liul 語幹	H.L	H.L.L	H.L.L	
	H.L	H.L.L	L.H.L	
母音語幹	H.L	H.L.L		

子音語幹動詞や liul 語幹動詞に見られるアクセント交替は中期朝鮮語と対応関係がある。なお、河須崎 (2010) で扱っている牡丹江出身話者では、liul 語幹動詞と母音語幹動詞に現れる型が本稿の話者より多い。牡丹江出身の両話者のアクセント交替は中期朝鮮語と対応を持つ。

5.2. 2音節語幹動詞

鉄力出身話者は、2音節語幹動詞は、ほとんどの語で語幹が一貫して L.H で現れている。1音節語幹動詞の場合はアクセント句が3音節の場合は H.L.L が標準的な型であったが、2音節語幹動詞では L.H.L の方が標準的と思われる。アクセント句が4音節の場合は、3音節目が H

で現れるものと L で現れるものがあるが、それが何らかの区別に用いられているようには見受けられない。いくつかの語は語幹が HL で現れ、長い語尾をつけた場合も語幹の HL が保たれるものがあった。

鉄力出身話者・2音節語幹動詞のアクセント（LH と HL の対立あり）

音節数	3音節	4音節	5音節
	LHL	LH.XL	LH.LLL
	HLL	HL.LL～LH.XL	HL.LLL～LH.LLL

語幹が HL で現れる語は、nolla-「驚く」、selob-「新しい」、sulpu-「悲しい」などである。n で始まる「驚く」が HL で現れる点で、音韻的特徴によってアクセントが決まるとは言い切れない。

亜布力出身話者は、アクセント句が3音節の場合は LHL、4音節になる場合は LH.XL、5音節になる場合は LH.XXL～LH.XXL のように、語幹は LH で現れるのが標準的な型である。ただし、selob-「新しい」、sulpu-「悲しい」、hulwu-「流れる」のような語は、語幹が HL で現れた。s や h で始まる語であり、頭子音がアクセントに影響を与えていると考えることが可能である。実際、HH のような音調も現れているので、アクセント対立ではなくなりかけている可能性もある。

亜布力出身話者・2音節語幹動詞のアクセント（LH と HL の対立あり？）

音節数	3音節	4音節	5音節
	LHL	LH.XL	LH.XXL
	HLL	HL.LL～LH.XL	HL.LLL～LH.LLL

牡丹江出身話者では語幹が LH で現れる語と HL で現れる語との対立が認められる。

牡丹江出身話者・2音節語幹動詞のアクセント（LH と HL の対立あり）

音節数	3音節	4音節	5音節
	LH.X	LH.XL	LH.XXL
	HLL	HL.LL～LH.LL	HL.LLL～LH.XXL

HL で現れる語は、ganul-「細い」、gul-「描く」、selob-「新しい」、jala-「育つ」などであり、音韻的に共通した特徴を持つものではない。中期朝鮮語と対応するものである。

6. 話者同士の比較からの考察

6.1. 名詞の比較

話者ごとの名詞のアクセントについてまとめると以下ようになる。

	鉄力出身話者	亜布力出身話者	牡丹江出身話者
1 音節名詞	言い切り形：HL 接続形：LH	言い切り形：HL 接続形：LH	主格助詞：HL 処格助詞：LH
2 音節名詞	LH HL（接続形では LH） ※ HL は数語 （音韻的特徴あり）	LH HL（助詞がつくと LH） ※ HL は数語 （音韻的特徴あり）	LH HL（助詞がつくと LH） ※ HL で現れる語に 音韻的特徴なし
3 音節名詞	LHX 対立なし	LHX 対立なし	HLL LHL LHH 対立あり

1 音節名詞は、いずれの話者もアクセント対立はないといえる。2 音節名詞について、牡丹江出身話者は単独形で LH と HL のアクセント対立が認められる。ただし HL で現れる語は長い助詞がつくと LH となる。鉄力出身話者と亜布力出身話者も HL で現れる語が数語あるが、それらは激音、濃音、母音、半母音で始まるという特徴を持つ。3 音節名詞では、牡丹江出身話者に 3 通りのアクセント対立が認められる。牡丹江出身話者の持つアクセント対立は、中期朝鮮語と対応関係を持っている。

6.2. 動詞の比較

	鉄力出身話者	亜布力出身話者	牡丹江出身話者
1 音節 語幹動詞	H.L, H.LL, L.HLL (-a / っ語尾：L.HL) が 標準 一部 H.LLL （音韻的特徴あり）	子音語幹：H.L と L.H liul 語幹：H.L と L.H 母音語幹：H.L 長いアクセント句で L.HL （音韻的特徴なし）	子音語幹と liul 語幹： 語尾による交替の型 による区別あり 母音語幹：H.L
2 音節 語幹動詞	LH HL（語尾で揺れ） ※ HL 数語 （音韻的特徴不明）	LH HL（語尾で揺れ） ※ HL 数語 （音韻的特徴あり）	LH HL（語尾で揺れ） ※ HL で現れる語に 音韻的特徴なし

1 音節語幹動詞について、鉄力出身話者では、アクセント句が 2 音節の場合は H.L、3 音節の場合は H.LL (-a / ɔt'a がついた場合は L.HL)、4 音節の場合は L.HLL が標準的な型になっている。liul 語幹動詞と母音語幹動詞で語幹が H で現れる語については、語頭子音が激音または濃音という特徴が見られる。亜布力出身話者では、子音語幹動詞、liul 語幹動詞においてアクセント句が 2 音節の場合に H.L で現れるものと L.H で現れるものがある。母音語幹動詞は、アクセント句が 2 音節の場合に L.H で現れるものはなかった。アクセント句が 3 音節以上の場合は L.HL、L.HLL となるのが標準的な型だと思われる。牡丹江出身話者では、中期朝鮮語と対応関係がある語尾によるアクセント交替が観察される。ただし、母音語幹動詞では交替が見られず、liul 語幹動詞でも交替の型が減っている。

2 音節語幹動詞については、いずれの話者も語幹がほとんど LH で現れる。語幹が HL で現れる語は、牡丹江出身話者では中期朝鮮語と対応関係がみられるものである。亜布力出身話者

では selob-「新しい」、sulpuw-「悲しい」といった s で始まる語が HL で現れているが、この 2 語は牡丹江出身話者でも HL で現れるものである。鉄力出身話者で HL で現れる nolla-「驚く」も牡丹江出身話者で HL で現れる。亜布力出身話者では他に huulw-「流れる」が HL で現れているが、これは牡丹江出身話者では LH で現れる語であり、その点からは音韻的特徴によって HL になっていると考えられる。中期朝鮮語からの対応と音韻的な条件とが入り混じった形でいくつかの語が HL で現れると言える。

7. 中国朝鮮語と中期朝鮮語との対応関係

中期朝鮮語にはアクセント対立が存在したと考えられている。現在、アクセント対立を持つ咸鏡道方言や慶尚道方言は、中期朝鮮語とのアクセント対応が見られる。以下は、Ramsey (1978) および Son and Ito (2016) を元に対応関係をまとめたものである（中期朝鮮語の R は上昇調、慶尚北道の : は長母音を表す。名詞と助詞との境界は本稿の表記に従って直してある）。

中期朝鮮語	咸鏡道	慶尚北道	慶尚南道
<u>H</u>	HL	H.H	H.H
L	L.H	H.L	HL
R	HL	H.H	L.H
HX	HL	HH	HH
<u>LH</u>	LHL	HL	HL
LL	LHH	LHL	LHL
RX	HL	H:H	LHH
HXX	HLL	HHL	HHL
LHX	LHL	HLL	HLL
<u>LLH</u>	LHHL	LHL	LHL
LLL	LHHH	LLH	LHH
RXX	HLL	H:HL	LHH

中期朝鮮語のアクセント型の現れには偏りがある。表中の下線はそれぞれの音節数で一番多く現れる型である。それぞれに対応する型が標準の型となりそうであるが、今回調査した話者では、2 音節語の標準の型が LH となっている点など、どちらかという咸鏡道方言に近い。咸鏡道方言に近いアクセントを持つ延辺で過ごしたことがある影響かもしれない。また、本稿では咸鏡道方言に近いアクセント体系を持つ牡丹江出身の話者がもっとも中期朝鮮語との対応関係を保持している。中期朝鮮語と咸鏡道方言がアクセント核の位置という点で一致している（中期朝鮮語は L から H になるところにアクセント核、咸鏡道方言は H から L になるところにアクセント核があると考えられ、その位置が同じである）ためかもしれない。

8. まとめ

中国朝鮮語話者のアクセント体系は、自身の出身地、また両親の出身地など様々な要因により非常に多様であることが窺える。その中で、徐々にアクセント対立を失いつつある状況も見ることができる。名詞については、2音節名詞にアクセント対立が残っていると見ることができるが、3音節名詞では牡丹江出身話者のみアクセント対立を持ち、1音節名詞ではいずれの話者もアクセント対立を失ってしまっている。2音節名詞のアクセント対立も、牡丹江出身話者以外では語頭音によって決まる傾向がみられる。動詞については、語によるアクセントの区別を最もはっきり持っているのは牡丹江出身話者であり、鉄力出身話者、亜布力出身話者でも、一部、アクセント対立ではないかと思われる型が現れる。ただしいずれの話者も、アクセント句が長くなるほど、語による区別がなくなってしまう。

なお、今回は個別の聞き取り調査であったので、本人が規範と思っている話し方をしたとも考えられる。他の地域出身話者との会話ではコードスイッチングが起きている可能性もあるので、その点は今後の課題となるだろう。また、中国朝鮮語の話者にとって、ソウル方言の影響も無視できない。アクセント句が長いとLで始まることが多く、語頭の激音、濃音は高くなるというソウル方言に似た特徴をすでに見ることができる。今後のアクセント体系の変化に注目していくことで、言語接触によるアクセント変化、また言語に内在するアクセント変化の方向などを探っていくことができると考える。

参考文献

- Ramsey, S. R. (1978) *Accent and Morphology in Korean Dialects*, 國語學叢書9 塔出版社
ソウル
- Son, Jae-Hyun and Chiyuki Ito (2016) “The accent of Korean native nouns: North Gyeongsang compared to South Gyeongsang” *Studies in Phonetics, Phonology and Morphology*, 22.3 : 499-532
- Author (s) So
- 李 文淑 (2008) 『全羅道方言から見た韓国語のアクセント変化について』 東京大学人文社会科学研究科 博士論文
- 河須崎英之 (2010) 「中国で話されている朝鮮語のアクセント比較」『東京大学言語学論集』29
東京大学文学部 言語学研究室 : 103-138
- 河須崎英之 (2013) 「黒龍江省鉄力出身朝鮮語話者のアクセント」『朝鮮語研究』5 ひつじ書房 : 7-25
- 蔡 玉子 (2005) 『中国延辺地域朝鮮語의音韻研究』太学社
- 車 香春 (2004) 「朝鮮語龍井方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』23 東京大学文学部 言語学研究室 : 1-22
- 高木 丈也 (2019) 『中国朝鮮族の言語使用と意識』くろしお出版
- 趙 習 (1992) 「中国的朝鮮族語言」『朝鮮学論文集 第1輯』北京大学出版社 : 229-235
- 朴 永梅 (2001) 「延辺朝鮮語のアクセントに関する考察」『京都大学言語学研究』20 京都大学文学部 言語学研究室 : 171-194
- 福井 玲 (2000) 「韓国語諸方言のアクセント体系について」『韓国語アクセント論叢』東京大学大学院人文社会系研究科 東洋言語研究室 : 1-20

宮下尚子 (2007) 『言語接触と中国朝鮮語の成立』 九州大学出版会

呂 海玉 (2009) 「中国ハルビン市における朝鮮語のアクセントと疑問文のイントネーション」
『方言・音声研究』 第3号、方言・音声研究会：57-75

<音素>

母音 /a, ɛ, e, i, ʊ, u, o, ɔ/

二重母音 /ya, yu, yo, yɔ, wa, wɛ, we, wi, wɔ/

子音 /b, d, g, j/ (語頭では無声音、語中では有声音)

/p, t, k, c, s/ (無声有気音)

/p', t', k', c', s'/ (無声無気音、喉頭化音)

/h/ /m, n, ŋ/ (ŋ は音節末のみ)

/l/ (音節初頭では [ɾ] (はじき音)、音節末では [ɭ])

<関連地図>



Various Phases of Accent System of Korean Spoken in China

KAWASUZAKI Hideyuki

This study describes the accent systems of Korean spoken in China, focusing on one speaker each from Tieli, Yabuli, and Mudanjiang. The accent systems of Korean spoken in China vary depending on the birthplaces of the speakers and their parents. It was found through a comparison of the systems of three speakers that the contrast in accent is astray. This contrast is found in disyllabic nouns but has been lost in monosyllabic nouns. The speaker from Mudanjiang has a clear accent contrast in monosyllabic verbs, while the speakers from Tieli and Yabuli have unclear ones. The contrast has been lost in longer accent phrases in the speech of all three speakers. The ways in which accent changes due to language contact or internal factors can be studied by observing these changes in the future.